

方言研究私見

藤岡勝二

方言は、とかく慰み半分に、坐興に、まともりなく、雑談の中に、取扱はれ易い。今の處誰も方言の所有者であるから、相當談しはづむ。従てなか／＼興味のある話柄になる。笑も起る。笑の中には褒貶が加はり兼ねない。所謂「地方なまり」として、そのあるものを、幾分いやしむ気分がこめられぬこともない。しかし、われ等が方言を取扱ふ態度は、そんなのではない。笑が生じなければ、興味がなとするほど、不眞面目ではない。方言を味ふ、研究するところに、智識上の欲求を充たさうとするのである。方言が社會現象の一種なる言語である以上、他の社會現象のやうに、いろ／＼のちがひなり、一致なりがある、そこを見たいのが、われ等の欲求である。

何の爲かと、やかましく言ひたてるより先きに、その種々相を御互に、あらはに見せあはせようとするのが、この同輩の今の立場であることを希望する。勿論、それについて詮索も起り、説明も生じ、或は、それに附帶し來つてゐる傳説なども紹介せられるだらう。が、何にしても、種がさらけ出されること、最も望ましい。

私一己の欲望に過ぎぬかも知れず、また、自分の見聞の狭さを暴露するに止るかも知れぬが、方言の實狀について

は、知らぬことが、甚だ多い。知つてゐるといへるのは、實は自分の方言であらう。よそのは、はし／＼を聞き囁つてゐる位だらう。さればこそ、それを知らせて下さる人々に對して有難く思ふのである。但し御互に、知らせあふについては、殊に書き物で之をする時に、注意していただきたいことがある。

注意すべきことを、やかましく學問的に云へば、甚だ多いが、それは、さておいて、地方を名のるにしても、あまりに廣いよりは町村等を細かく示すことにしたら、よからうと思ふ。場合によつては、同一市内で、或る部分と、或る部分とちがふことさへあるからである。その言葉をつかつてゐる人々の年頃、性別も、時には必要である。また案外に、古くなつて今はなくなつてゐるのを今あると思つてゐることもあるから、氣がつけば、それも注意した方がよい。これ位のことを注意するのは、そんなに面倒でなからうし、それで、御互に、利する所があるとすれば、結構なことと思ふ。

私は、以上の様なことよりも、職業や、身分などで、ちがふことを知らせあひたいと思ふ。これは、或は感情問題を、ひき起さないとも限らぬから、幾分遠慮される方も、あらうけれども、知らないことを、知らせあふといふ點、——あなたがち、あばくといふ底意があつてでなく、——に於て、益があると信ずる。といふのは、私共は(否私は)職業によつてちがふ語なり、云ひ方を甚だしく知らない。あなたがち隠語といふのでないもので、さういふ類を、知らずにゐる。推測のできる程度の差しか、なければ、當りもつくが、そんなものばかりあるわけはない。親切に知らせて下さる方を待たねばならぬ。これは、藝術の上にも、現はれてゐることで、それが爲に、その語、その云ひ方の中心たる意味の外に、或る香、或る味がついてゐるらしいから、その方から、觀ても、捨てゝはおけぬと思ふ。

のみならず、通常方言としてゐるものも、職業等に因る言葉にしても、國內で、所謂普通語と稱するものと、共存してゐるから、一方が他方へまで喰ひ入ることが、少くない。文語といふものとも、交渉がある。本當に一方を了解しようと思へば、他方を全く眼中におかないわけにはいかない。到底、一人で、わが國語を全部知りぬくことは出来ぬが、現在行はれてゐることで、全部はとも及ばぬが、單なる智識的欲求から、また、種々のこととの關係を明かにする爲からも、何とかしても、ひどく、驅けまはらなくても、知れるやうに、せめて、見當だけでも、つくやうにしたいものと思ふのである。

かやうにして、積り積れば、人々の智識が合されゝば、貴い結果が生れると信ずる。かくすることの効能は、並べ立てれば、いくらもあつて、内外の諸士が既に言はれた通であるが、こゝには、一切堅苦しい議論めいたことは、こゝと／＼く省きたいと思ふ。また、研究の方法論も、學問としては、いふべきであるが、それも、さしおいて、まづ、ひとへに、いろ／＼の種が、いろ／＼に集められることを希望して止まない。

最後の注文として、申せば、言葉で説明しきれないか、又は、言葉を以ての説明では、誤解が起ると思はれる様な場合には、畫を入れていたゞきたい。自分にはあまりに知りぬいてゐることで、よそのものには、言葉だけでは、わからぬことが、なか／＼あることも、この希望を起させる理由である。